

題目：三条西家本を中心とした室町期源氏物語本文史の研究

【目次】

第一部 序論

序論 室町時代の源氏物語

第一章 はじめに

第二章 室町時代における源氏物語享受の特色

第三章 注釈の特色

第一節 増大した注釈項目

第二節 細切れな注と短文化した見出語

第三節 文脈解析注の登場

第四節 注釈内容の簡潔化

第四章 室町時代源氏物語本文史上の実隆

第一節 物語の証本一様ならざるか

第二節 青表紙本と申正本、今は世に絶たるか

第三節 応仁の乱と古典籍復旧運動

第四節 宗祇・肖柏の場合

第五節 三条西家の場合

第二部 三条西家以前

第一篇 定家本源氏物語をめぐる基礎的考察

第一章 〈四半本〉と〈六半本〉の成立について

第一節 池田亀鑑の青表紙論

第二節 池田説をめぐる従来諸説

第三節 本稿の立場

第二章 〈六半本〉と三条西家本

第二篇 定家本の行方

第一章 鎌倉時代

第一節 『原中最秘抄』の場合

第二節 『幻中類林』の場合

第三節 「延慶両卿訴陳状」と青表紙本

第四節 兼好、青表紙本を見る？

第二章 長慶天皇がみた、ふたつの定家本

第一節 『仙源抄』と〈四半本〉

第二節 『仙源抄』と奥入

第三節 なぜ青表紙本と呼ばなかったのか

第三章 『河海抄』の場合

第一節 四辻善成の学統

第二節 『河海抄』所引の定家本

第三部 三条西家源氏物語の世界

第一篇 焼け跡から始まった三条西家の源氏研究

第一章 焼け跡から始まった三条西家の源氏研究

第一節 実隆の前半生

第二節 連歌師宗祇の源氏研究

第二章 実隆の〈文明本〉をめぐる

第一節 実隆〈文明本〉の成立と終焉

第二節 成立してからの〈文明本〉

第三節 書陵部本をめぐる考察

第三章 新出資料、紅梅文庫本から見えてきたこと

第一節 紅梅文庫本の書誌

第二節 実隆〈文明本〉との関係

第三節 書陵部本との関係

第二篇 三条西家における源氏物語の本文形成史

第一章 最初の源氏本文〈文明本〉

第二章 二度目の本文〈永正本〉

第一節 成立経緯と転写本

第二節 〈永正本〉時代における実隆の事績—第二次『弄花抄』の編纂

第三節 〈永正本〉時代における実隆の事績—公条への源氏講釈

第四節 〈永正本〉時代における実隆の事績—『細流抄』の編集

第五節 〈永正本〉と吉川本

第六節 〈永正本〉の売却

第三章 三番目の本文〈大永本〉

第一節 成立経緯とその転写本

第二節 〈大永本〉を用いた事績—講釈と『細流抄』第一次送付本の作成

第三節 〈大永本〉の売却

第四章 実隆最後の本文〈享禄本〉

第一節 成立経緯

第二節 日大本の書写奥書から見た〈享禄本〉の底本

第三節 紅梅文庫本を導入して見えてきたこと—桐壺・簀木・空蝉

第四節 紅梅文庫本を導入して見えてきたこと—花宴

第五節 蓬左文庫本

第三篇 注釈書からみえてきた三条西家の本文校訂

第一章 本文資料としての見出し語の問題点と可能性

第二章 『公条自筆細流抄』にみる公条の本文校訂

第三章 三条西家の本文観

結 語

本論文は、室町時代に於いて源氏物語の本文がどのように作られていったのかという問題を、〈源氏学の家〉と謳われた三条西家の場合を中心に考察したものである。「序論」「三条西家以前」「三条西家源氏物語の世界」という三部から構成されているが、部毎の内容については既に「要旨」の項でまとめておいたので、ここでは研究のねらい・方法、それによって得られた諸データのうち特に強調したい結論、今後の見通しについて述べておく。

本稿が本文研究の照準をあえて〈混成本文の時代〉といわれた室町期にあてた理由は、この時代の特殊性にある。空前の源氏物語ブームで享受者層が拡大し、写本や注釈書（享受者層の拡大に連動して質的变化も遂げている）の需要も増加した時代であったこと。にもかかわらず、応仁の乱（十年にもわたって京が戦場となった）の戦禍で数多くの貴重な古写本が焼失し、それらを補うために焼け残った写本群を再活用・再構成しての古典籍復旧運動が行われた時代でもあったこと。そうした混乱状態のなかから、現存する最善の青表紙本とされている大島本や藤原定家自筆柏木巻の臨模を含む明融本が、作成されてきたからである。

大島本と明融本について更に言うならば、この両本は当該写本以外にはこれといった周辺資料に恵まれず、成立経緯の曖昧さや書入れの複雑さ等々、本文史的には不透明な部分を抱えたままの状態だといえる。それに比べて資料が潤沢に残っている三条西家本を取り上げ、室町時代どのようにして源氏本が作成されていったのか、三条西家の場合で考えてみたら、あるいはそこから何か逆照射できるものがあるのではないかと、とも思われた。

また三条西家の本文を選んだもう一つの理由は、彼らが、それまでは既に断絶したとされていた青表紙本を取り上げ、自家の本文とした点にある。今日の研究結果によれば、青表紙本としての純度は大島本に遠く及ばないとされてきた（ことに書陵部本の本文状況が問題である）。それならそれで、ではどうしてそうなってしまったのか、三条西家本なるものを整理し、跡づけておく必要性を感じたからである。

方法としては、以下の通り。まず数ある三条西家関連諸本を整理し、その中から三条西家本の骨格となる本文を〈実隆が自身の手沢本とした本文〉と規定し、その部分を徹底的に押さえることにした。

『実隆公記』によれば、手沢本は少なくとも四度作成されている。これらを作成年代から〈文明本〉〈永正本〉〈大永本〉〈享禄本〉と仮称するならば、最後の〈享禄本〉が現存する日本大学本である。他の三本は実隆が売却し、今では悉く散逸してしまったが、今回、〈文明本〉の転写本系であるところの紅梅文庫旧蔵本（以下、紅梅文庫本と略）を再発掘できた。本研究の眼目の一つは、この紅梅文庫本を活用できた点にある。同本を導入することによって、三条西家本の新たな位相が見えてきたからである。

また本文研究といえ、ともすれば各写本の書誌や本文相互の比較分析に終始しがちだが、本研究では源氏物語の注釈書等に引用された源氏物語の本文、見出し語、異文注記等も、本文資料の一つとして積極的に活用した。結果、宗祇が『種玉編次抄』『雨夜談抄』で依拠していた源氏本の状況や、第二次『弄花抄』時の依拠本文となつたであろう〈永正本〉の状況、公条自筆本『細流抄』における公条の書入れから垣間見られる依拠本文の状

況等を垣間見ることができたように思う。

更に三条西家の注釈書にみる〈諸本論〉、『弄花抄』『細流抄』『明星抄』『山下水』といった三条西家の注釈書間における見出し語の変化（同一項目でありながら見出し語が変化している場合など）を抽出し、当時の依拠本文であったところの三条西家本の本文と比較分析してみた。

結果、様々なデータが得られたが、特に強調したい結論、今後の見通しについては以下の通りである。

一、紅梅文庫本はその奥書から、実隆最初の手沢本である〈文明本〉の転写本系とみられること。また池田亀鑑氏が『源氏物語大成』で紹介し、以後所在不明となっていた「日高氏蔵本」であろうこと。

池田氏は同本を根拠に「実隆が書写した本が有り、その本文はなほ純粋な青表紙本の特性を伝えてみた」と推測したが、紅梅文庫本を調査した結果、全冊青表紙本であったこと。また大島本以上に、『藤原定家自筆奥入』にみえる残存本文（その土台となった定家の揃い本を〈六半本〉と仮称している）に親しかったこと。

二、従来三条西家本は、書陵部本と日大本を中心に論じられてきた。だが紅梅文庫本との比較により、書陵部本は実隆協力本であって、実隆手沢本の系列からは除外すべきであること。書陵部本を外し、代わりに紅梅文庫本をおいてみると、三条西家本の位相はかなり大島本に近づいてくること。

実枝が、「阿仏和讒にて奥入をはきり出して物語の本計為氏へ返された」等と講義していること等から、三条西家の人々は、巻末に奥入が無い本文、つまり現存する〈六半本〉のようなものを「青表紙証本」とみていたろうこと。

三、従来、三条西家の人々は自らの解釈によって、本文を恣意的に改めているとされてきた。だが『明星抄』によれば、公条は恣意的改竄を憎み、それが無いから青表紙本がよいと主張していた。実際、公条は注釈書においては自らの解釈によって見出し語を変更しても、当時の依拠本文とみら日大本の本文は訂正しておらず、加筆された場合でも異文注記が確認できる程度であった。

三条西家の人々は底本通りに書写していたのであって、河内本との接触が見られたとしても、それは底本自体が既にそうになっていたためと思われること。

なお博論提出後、三条西家の古今伝授資料を調査中に（三）を増強する資料を発見した。また紅梅文庫本柏木は大島本以上に、定家本に親しいこと。紅梅文庫本早蕨は音便による異同をはずせば、大島本に次いで（鎌倉期の池田本よりは遥かに）定家本に親しいことも判明した。どうやら実隆の手沢本は最初のものが最も定家本に近かったようである。加えて、三条西家の人々が本文を恣意的に変えていないとするならば、三条西家本によって大島本の不安定な箇所も補うるのではないか、という希望を抱いた。

とはいえ、室町時代の源氏本作りは取り混ぜ本を底本にすることが多かった。大島本も〈文明本〉も取り混ぜ本だった可能性がある。今後は、そうした見通しを抱きながら、巻毎の精査から再出発するつもりである。